

第16章 アルフレッド・R・リンドスミスと科学的方法 初期シカゴ学派と第二次シカゴ学派のあいだで

佐藤 哲彦

1931年にシカゴ大学大学院に入学したアルフレッド・R・リンドスミスは、いわゆるシカゴ学派のスタッフの授業に出席しながら研究経歴を始め、のちにシンボリック相互作用論に基づいた社会心理学の教科書を編集するなど、その領域の代表的な研究者の一人となる。ここでは、かれの研究がどのようにして成立したのかというその経緯を、かれの研究方法やそれに対する述懐、かれを指導した研究者との関わり、さらには、かれが措定した思考上の他者との関わりを通して、描き出す。そしてそのことにより、のちにシンボリック相互作用論と呼ばれることになるある特定の思考方法による調査研究が、シカゴ学派における調査研究の、ある種の再編成・再配置によって成立したことが明らかにされる。

はじめに

ゲイリー・アラン・ファイン (Gary Alan Fine) の編著である『第二次シカゴ学派?』(Fine 1995) は、1945年から60年までのシカゴ大学大学院のスタッフとその修了者の業績を資料として、そこで準備されたシンボリック相互作用論の起源と展開について、いくつかの角度から論じたものである。ここではとくにシンボリック相互作用論それ自体の発展という点で、理論的な祖としてハーバート・ブルーマー (Herbert Blumer) が、さらには方法的な祖としてエヴァレット・ヒューズ (Evalett Hughes) が取り上げられ、その後の展開を組織化したものとして論じられている (Colomy and Brown 1995)。

これらとはいくぶん異なり、本稿では、その時期に先立つ研究者としてアルフレッド・レイ・リンドスミス (Alfred Ray Lindesmith) をとりあげる。そして、1945年より以前にすでに、シンボリック相互作用論の枠組みが準備され、展開されつつあったことを、リンドスミスの方法と業績、さらにはそれらに対する本人の述懐をもとに書き記していくことにしたい。ここではとくに、リンドスミスによる科学的方法の準備と発展の契機となった「他者」はなんだったのか、ということに気を配っていくことになるだろう。これは、のちにシンボリック相互作用論と呼ばれるようになるある特定の思考方法 すなわち、シンボルをめぐる相互作用を中心において人間の協同活動や社会関係を分析する思考方法 が、どのような形で、それ自体どのような相互作用をとおして、自らを発展させてきたのか、その発端を知る手がかりを提供するためである。

もっともこの作業は、先の『第二次シカゴ学派?』を否定しようというものではない。そうではなく、これはまず、ここでさしあたって初期シカゴ学派と呼ぶシカゴ大学大学院における1930年前後までの時期、すなわちいわゆるシカゴ・モノグラフが数多く出版されていたころまでの時期と、ファインらがあえて構築した第二次シカゴ学派の時期とのあいだにあって、特にシンボリック相互作用論の調査研究上の特徴である質的な調査研究が、ある意味ネガティブな事情のもとでも生き残り、そしてネガティブな事情のゆえに生き続けたことを示す試みである。さらに付け加えるならば、リンドスミスの科学的方法にみられる、初期シカゴ学派と第二次シカゴ学派の結び目のひとつを素描する試みでもある。

1 リンドスミスの薬物研究

リンドスミスは、わが国ではほとんど知られていない研究者が、あるいは当初はアンセルム・ストラウス (Anselm Strauss) とともに、のちにはノーマン・K・デンジン (Norman K. Denzin) を加えた形で、社会心理学の教科書 (たとえば、Lindesmith et al. 1978=1981) を編集した程度に知られているにすぎないようである。しかしながらこの教科書の訳者である船津衛が次のように記しているように、かれはシンボリック相互作用論においては、比較的重要な位置を占める研究者といえるだろう。

(引用1)

筆者のA・R・リンドスミスは、現在、インディアナ大学の教授であり、一九三〇年代という早い時期から麻薬常用者の世界についての社会学的、社会心理学的研究を行い、主著としてOpiate Addiction (Principia Press) 1947、Addiction and Opiates (Aldine) 1968などがある。一九七九年に「G・H・ミード賞」(ミードの伝統と精神の発展に貢献した学者に与えられる) を獲得しているように、H・ブルーマーと並んで、ミードの最良の後継者であり、この領域の重鎮的存在である。(Lindesmith et al. 1978=1981: 訳者あとがき)

さてそのリンドスミスは、1931年にシカゴ大学大学院に入学し、1937年、「阿片依存の性質 (The Nature of Opiate Addiction)」という題目で博士論文を提出、学位を取得している。そこでまず、次に取り上げるのは、かれの薬物研究である。以下では、その進展過程を比較的详细に追ってみたい。

1.1 研究の始まりと方法の選択

かれによれば、かれは入学後、初期シカゴ学派のスタッフらの授業に出席しながら、当初は同性愛の研究を行うことを計画していた。ところがその研究に対するスタッフの評判は芳しくはなかったという。

(引用2)

私がそこに加わったのは、1931年の秋でした。私はパーク (Park)、バージェス (Burgess)、エルスワース・フェアリス (Ellsworth Faris)、ワース (Wirth)、ブルーマー、オグバーン (Ogburn)、スチュアート・ライス (Stuart Rice)、ラドクリフ ブラウン (Radcliffe-Brown) といった人たちのコースをとりました。私が最も世話になったのはブルーマー博士で、かれは私にミード流の社会心理学とそれに関連する思想の流れを紹介してくださり、さらに、かれのおかげで私は薬物の研究を始めることになり、それがやがて大きな仕事へとなったのです。博士論文の題材について、私は当初は同性愛を選び、その領域でインタビューを始めていました。私がこの計画について教授陣に相談したところ、かれらは熱意を示しませんでした。私はときおり、教授陣が私自身を、こいつはなにかしら逸脱してるんじゃないかという風に、疑いの目で見ていると考えたりもしました。いずれにしても、私はこの計画に嫌気がさして放りだしてしまい、教養があるように見えて、逸脱の匂いのしない、ドイツ社会学にかんする図書館での研究という考えにいたったのです。(Lindesmith, 1981: 87)

このような状況にあったリンドスミスに薬物の研究を薦めたのがブルーマーである¹⁾。といっても、同性愛の研究、ドイツ社会学の研究、薬物の研究、と短期間に移り変わったわけではないようだ。かれ自身によれば、薬物依存の調査を開始したのは1935年である(Lindesmith 1965: vii)。したがって、薬物研究自体は、博士課程在学中の後半に始まったものにすぎず、それが1931年から1937年までという比較的長い在学期間の原因のひとつとも考えられる²⁾。そしてリンドスミスに薬物の研究を薦めるようブルーマーに進言したのは、ブロードウェイ・ジョーンズ(Broadway Jones)であったという。

ブロードウェイ・ジョーンズとは、エドウィン・H・サザランド(Edwin H. Sutherland)とともに『詐欺師コンウェル』(Conwell and Sutherland 1937=1986)を著したことで知られる、詐欺師コンウェル(Chic Conwell)その人である³⁾。コンウェルは、サザランドの授業にゲスト講師としてやってきたのちにリンドスミスと知り合いになり、二人はホームレスのためのイリノイ州のプログラムで仕事を得て、同じオフィスで働くことになった。コンウェル自身、十代後半から始まる薬物依存者の経歴をもち、リンドスミスにとって最も重要なインフォーマントであった(Lindesmith 1968: 5)⁴⁾。

さて、ブルーマーの薦めで薬物の研究を始めたリンドスミスは、レキシントンなどの施設における大規模なインタビュー調査を計画していた。ところが、これはある事情で挫折することになる。

(引用3)

その習癖(引用者注:依存のこと)についてのシステマティックな分析を行うというアイデアを胸に、最初に依存者たちに話しかけ始めたとき、私はそれが提出する理論的問題に魅了されるようになった。私は自分の分析を、なん百人もの依存者たち、いや、おそらくは、なん千人ほどの依存者たちへのインタビューのもとづくものとしようと夢みたのである。この目的のために、私はサザランド教授の有能なオフィスをとおして、連邦刑務局(the Federal Bureau of Prisons)からレキシントン公衆衛生局病院(Lexington Public Health Service Hospital)とリーベンワース(Leavenworth)の連邦重罪刑務所(the Federal Penitentiary)別館で依存者たちにインタビューする許可を得た。これらの施設はその時点では、薬物犯罪者を扱うことを専門としていたのである。しかしながら、公衆衛生局は、ここもまたこれら二つの施設で権限を行使する立場にあったのだが、私が申し込んだ調査はすでにその職員が行ったものだとすることを理由に、許可を与えることを拒否したのである。その結果、私は、シカゴの街頭で対象者を探したり、調査にかかるお金をほとんどすべて自分の懐から出したりするといった、お金がかかり、遅々として進まない、骨の折れる技法に頼ることを余儀なくされたのである。(Lindesmith 1968: 5-6)

すなわち、リンドスミスが施設外でのインタビューを選んだのは、しばしば調査に伴うやむを得ない事情がもととなっていたということである。それは最初から選択されていたわけではなかったのである。そしてこの、ある意味で否定的な状況が、結果的にリンドスミスの研究にとって、肯定的に働いたことは十分考えられるだろう。というのは、施設外におけるインタビューは施設内インタビューとは異なり、対象者の確保それ自体が極めて重要な目的となり、その確保の過程自体が、対象者がどのようなものなのか、なにを考えているのか、を映し出すからである。それは以下の記述からもうかがえるだろう。

(引用4)

依存者たちに私と親しくしたままでいてもらうために、私はたいてい、安い食堂や飲み屋で食事を御馳走したり、インタビューの後に50セントか1ドルをあげたりするなど、かれらに報酬を与えたのである。かれらとの会話は飲み屋や食堂で行うことをルールとしていた。ほとんどの対象者は非常に協力的だった。それは、依存者というものは誰でも、そしておそらくはどんなときでも、自分の依存については非常に多くのことを話したり考えたりするからだということもあるにはあるが、かれらが、客観的で非道徳的な依存の研究が必要であり、それがあつたらより合理的な公共政策に結びついて自分たちも恩恵を受けようと感じていたからなのである。依存者たちのあいだには、依存は理解されていない、マスメディアでは誤って伝えられている、非人間的で不必要に過酷なやり方で処遇されている、といった感覚が広く行き渡っているのである。依存者の知人と付き合いのある非依存者は、一般的に、見下したり権威主義的な形でかれらと付き合い、かれらに説教をすることも多い。私はこのようなことすべてを、私自身が不快に思ったりぎょっとしたときでさえ、意識的に避けた。私は見下すような感じは持たなかった。それは対象者が私にとって有益な情報を持っているということを知っていたからであり、それがために私自身がかれらによりかかっているということを知っていたからである。結局のところ、私は権威主義的になるような立場にはなかったのだ。なぜなら対象者はかれらが望めばいつでも関係を絶つことができたからである。(Lindesmith 1968: 6)

このように対象者確保の過程は、調査者にとって対象者とより自然な　そしてこの場合「自然な」とは主として対象者の観点において「自然な」　関係を保とうという努力を必要とする。そのため、その過程自体が、対象者がどのような世界に生きているのかを映し出すものとして現れるのである。この状況は、依存という現象をかれらの経験の中から理解しようというリンドスミスにとって、あるいは、かれらの経験の中から理解せざるをえなかったかれにとって、重要な意味をもつものであったといえるだろう。

さらに驚くべきことは、大規模ではあるものの、それをインタビューで行おうとしている点である。数百人・数千人のインタビューというものは想像しがたいが、逆にいえば、それだけインタビューに固執しているということを示している。このこだわりについてはのちに触れることになるだろうが、いずれにしても、それがゆえにかれは、主としてコンウェルの紹介によりインタビューを展開していくことになる。

(引用5)

すべてというわけではないが多くの対象者は、ブロードウェイ・ジョーンズから紹介してもらった人たちである。かれは、かれらと私の両方にあらかじめ話を通しておいてくれた。かれらのほとんどは、薬物密売、なんらかの形の窃盗、信用詐欺など、犯罪活動の経験があつた。ジョーンズ氏は、私に、私の新しい対象者は信用できないとか、その人といるときは片手は札入れに、もう片方の手は腕時計においておくべきだとか警告してくれることもあつた。別のときには、その調査対象者は「誠実な詐欺師」として特徴づけられる人物で、絶対に信用できるし見知らぬ人からしか盗まなかつたので、私はかれを自宅へ連れていっても差し支えなかつた。対象者の中の大勢が、実際に私のアパートに私や妻、娘を訪ねてきた。誰ひとりなにかをちよるまかした人はいなかつた。反対に、かれらの多くが私たちに盗品をくれようと申し出たのである。(Lindesmith

1968: 6)

このような形で始まったリンドスミスの調査研究は、ある独特のプロセスをたどることになる。というのは、今日の調査研究からすると、多くは文献研究から始まって、仮説作成を行い、そののちに調査を行うという過程を経るものと考えられているだろう。しかしながら、かれはそのような過程をたどらない。かれは「予断を避けるために」(Lindesmith 1968: 7) 最初に文献には当たらずに調査を行い、調査において組み立てられつつあった仮説を、そののち文献によってより洗練していくという過程をたどる。そしてこれは後述する理論構成方法と密接にかかわっているのである。では次に、リンドスミスの依存理論の構成方法について触れておきたい。

1.2 依存理論へ

(引用6)

本書の中で呈示される理論は、最初の方では、依存者たちを観察したり、かれらと会話したことから導かれている。この研究の理論的枠組みが後の方で発展する部分は、莫大な文献中にあった使用可能なデータに重大な影響を受けている。約五十人の依存者にインタビューを行ったが、それらはお互いに信頼できるほどのインフォーマルで仲の良い関係を取り結ぶのに十分な期間をかけて行ったものである。それ以外の十二人の事例では、少なくとも一回はインタビューをしてはいるものの、関係は希薄かあるいは話してくれたことに十分な信頼をよせることが無理だったり、個人の依存史について完全で一貫した説明を得るのが無理だった状況下で行われたものである。(Lindesmith 1968: 4-5)

ここで触れられている理論構成方法は、分析的帰納(analytic induction)と呼ばれるものである。それは、少数の事例にもとづいて初期の仮説を構成し、さらなる事例研究において、当てはまらない否定的証拠(uncovering negative evidence)の検討を行い、結果的にすべての事例に当てはまるように仮説を順次洗練していくという過程を経る理論構成方法である。この方法は、こののちドナルド・クレッシー(Donald Cressey)や、ハワード・S・ベッカー(Howard S. Becker)の研究においても使用されることになるが、その有効性を最初に示したのがリンドスミスである(Colomy and Brown 1995: 64-65)⁵⁾。

リンドスミスはまず、依存を次のように定義する⁶⁾。すなわち、

(引用7)

依存とは、まず第一に、特定の薬物に対する強烈で意識的な欲求によって特徴づけられ、さらに、その初期の段階で確立された態度への固執によって引き起こされる再使用の傾向によって特徴づけられる行動として定義されうる。(Lindesmith 1968: 64)

したがって最初に依存形成のプロセスが議論される。ここでまずかれが問題としたのは、同じ薬物の使用者のなかで、どうしてある人は依存になり、他の人は依存にならないのか、ということである。この問いに対しては、自分が摂取している薬物がなにであるのかを本人が知っているかどうかによる、という答え方が可能であり、これが初期の仮説となる⁷⁾。もっともリンドスミスによれば、この仮説は「否定的証拠によって一瞬のうちに破壊された」(Lindesmith 1968: 7)。その否定的証拠とは、調査

の初期にインタビューをした医師が、自分がモルヒネを使用していることを知っていたにもかかわらず、その時点の連続使用においては依存にならなかった、というものである。リンドスミスはこの事例について、随分と悩んだようである。しかしながらあるとき、モルヒネの生理学的効果についての医学論文におけるなに気ないコメントが、この窮地を救ったという。そして次に第二次仮説が構成された。すなわち、

(引用 8)

人が依存になるのは、自分が経験している退薬の苦痛の意味に気づいたり感じたりしたときであり、もし退薬の苦痛に気づかなければ、他の理由にかかわらず、その人は依存にはならないということ (Lindesmith 1968: 8)

がそれである。だがこれもやがて不十分であることがわかり、この「退薬の苦痛の認識」という認識の強調から、「苦痛の認識という洞察が起こったあとに苦痛を緩和するために実際に薬物を使用する」という行為の強調へと焦点を移すことで、仮説の最終改訂版を構成することができたのである⁸⁾。

(引用 9)

依存は、退薬の苦痛が適切に理解あるいは解釈されたのちに、すなわち、その苦痛が阿片使用習慣のまわりに発達する言語的シンボルと文化的パターンに関連した形で個人に表されたのちに、その苦痛を緩和するために阿片を使用したときにのみ起こるのである。(Lindesmith 1968: 191)

9)

かれ自身もいうように (Lindesmith 1968: 8) この仮説の特徴は、依存の発端 (かれ自身の言葉では origin) をひとつの事象 (a single event) に求めるのではなく、一連の事象 (a series of events) に求めているということである。これは、依存それ自体もまた、過程であるという観点を導くことになる¹⁰⁾。

では、このような独特の観点はどこから導き出されたものなのか。リンドスミス自身は、これはプラグマティズムの哲学者であり教育学者でもあったジョン・デューイ (John Dewey) によるものであると、のちに述懐している。

(引用 10)

まず最初に私は、研究を必要十分条件の観点から扱おうとしました。最終的に私は、原因は、条件でも変数でも物事でも事件でもなく、ひとつのプロセスとして捉えられなければならないという結論に達したのです。デューイが論じているように、原因とは一連の相互作用のプロセスであり、そのプロセスの後の方の段階において、原因が結果を産出する、あるいは、原因が結果へとなるのです。結果と呼ばれているものと原因と呼ばれているものは、問題と捉えられているプロセス全体における特定の段階あるいは局面なのです。(Lindesmith 1981: 88)

ところが、ここでリンドスミスが言及しているデューイの研究は、『論理：探求の理論 (Logic: The Theory of Inquiry)』である。その発行は 1938 年であり、リンドスミスが研究をまとめ終えてからのちに出版されていることになる。それゆえ、おそらくデューイについてもまた、ブルーマーがあら

かじめいくつかの論考を紹介したのではないかと考えられる。というのは、先の引用(引用2)にもあるように、ブルーマーはかれに、ジョージ・H・ミード (George H. Mead) と「それに関連する思想の流れ」を紹介したのであり、その中にデューイの業績が含まれていても不思議ではないからである¹¹⁾。

さて、デューイとともにリンドスミスが負っているのがミードである。これは先の引用(引用2)からもあきらかだが、理論的枠組みとしてのミードの役割を、かれ自身が依存にかんする最初の論文に書き留めている。

(引用11)

ジョージ・H・ミードの著作を研究する者は、この仮説(引用者注:リンドスミスの依存理論)が『有意味シンボル』と人間生活におけるその役割についてのかれの理論の流れを追従するものであることに気づくだろう。ここで提出された観点からすれば、『有意味シンボル』(あるいはおそらく、デュルケームの言葉を借りれば、『集合表象』)を薬物の生理的効果に適用してはじめて、その効果がその人の精神的社会的生活に影響を及ぼすのである。そしてそのシンボルは、集団によってその効果を叙述するべく用いられるのである。(Lindesmith 1938b: 607)

同時に、分析的帰納についてもまた、ミードの影響を多分に受けていると考えられる。この影響関係は今まで看過されてきたものでもあるので、とくに強調しておく必要があるかもしれない。たとえば、リンドスミスはのちに分析的帰納による仮説再構成の重要な契機を否定的証拠 (negative evidence) あるいは否定的事例 (negative case) と書き記すことになるが (Lindesmith 1968)、当初の論文ではこれを例外的事例 (exceptional case) あるいは例外 (the exceptional) としている (Lindesmith 1938b)。実はこの表現自体がミードのものであり (Mead 1917)、これらをミードのいう「科学の成長点 (growing point of science)」であると述べていることから、それがうかがえるだろう (Lindesmith 1938b: 609; 1981: 88)。

2 他者の構築と自己の同定

以上のような薬物研究において、社会的文脈ということを考えあわせると、そこには、リンドスミスの研究の意義、それもかれ自身が当初から意図していたものだけでなく、研究と、さらにはそれをめぐる対話の中で現れてきた意義が、明白な形でみえるだろう。そしてさらに、リンドスミスにおいて初期シカゴ学派と第二次シカゴ学派が結びついた事態を把握することも可能になる。

ここでいう文脈における意義とは、リンドスミスの薬物研究における他者の構築であり、その他者との対比における自己、すなわち薬物研究それ自体の位置の同定である。そしてかれの場合、その主張がしばしばある種の激しささえ伴っていたために、まさにその他者によっても、かれの研究の位置が同定されることになる。

もっとも、この作業は、かれの薬物研究に限らない。かれは犯罪学の系譜研究においても同様の作業を行っている。そしてこの両領域で繰り返される他者を表象する言葉は「神話 (myth、あるいは mythology)」であり、それに対して対置される、かれ自身の研究を表象する言葉は「科学 (science)」である。

2.1 精神医学

ではリンドスミスはなにに対して、かれ自身の薬物研究を対置したのだろうか。そこでは、まず精神医学が問題とされる。

(引用 12)

精神医学者は阿片の使用を人生からの逃避だとしばしばみなしてきた。さらに、依存者を欠陥者とみなし、かれらが自分の劣等性や精神的な葛藤を補償している、あるいはそれらをさげょうとしているとみなしてきたのである。予想されるように、依存者は「精神病者 (psychopath)」とラベルを貼られてきた上、そこには、この曖昧なラベルが、いくつかの不可解な方法でその現象を説明したという前提が伴っているのである。(Lindesmith 1938b: 594)

そしてこのような観点は、大部分の医学雑誌の執筆者が有しているものであると同時に、一般化しているものであると注釈している (Lindesmith 1938b: 594 footnote3)。ここでかれが「不可解な方法」といっているのは、端的には、科学性の欠如という事態である。具体的には、ある程度の割合で精神病者ではない依存者が存在するという事態を説明できないということであり、あるいは、そのような存在に対して以下のように説明される事態である。

(引用 13)

欠陥が表立っていないような人は、隠れた欠陥を有しており、これが依存を説明するという推測がなされることもある。そのような推測は、あきらかに現実的な調査研究の領域をこえた、手も足も出ない困難を配置してしまう。さらにいえば、こう聞いてみてもいいだろう、われわれの中で誰が、隠されたものであれ、あきらかなものであれ、なんらかの欠陥をもたないというのだろうか？ (Lindesmith 1938b: 596)

リンドスミスはこのような精神医学的解釈を、事態を説明するというよりもそれを非難するためのものだと断じる。これにかんしては秀逸な応答がある。まず、米国社会学雑誌 (以下、AJS) に掲載されたリンドスミスの論文に続いて、シカゴ大学精神医学部 (Department of Psychiatry) の医師デビッド・スライト (David Slight) が、これに対するコメントを行っている。スライトはいう。

(引用 14)

ストラウスから引用された事例 (引用者注: Lindesmith 1938b: 601) は、この仮説 (引用者注: リンドスミスの依存理論) をどのようにも支持していないように思える。この女性は退薬症候のせいで依存者になったわけではなく、激しい精神的苦痛にある状況からなんとか逃れようとして依存者になったのだ。(中略)かれは薬物依存にかんする現在の諸理論は、科学的というよりも道徳的であるようだという。これはこの主題についての多くの心理学的・精神医学的研究について、正しく解釈しているものとは思われない。(Slight 1938: 610)

これに対してリンドスミスは、スライトのコメントを引用しつつ、次のように回答する。

(引用 15)

かれは誰でも知っている事実を考慮していない。それはすなわち、多くの依存者が、「精神的苦痛」とは決して結びつかない条件下で薬物を使用し始めるということである。(中略)このような見方(引用者注:精神的苦痛からの逃避という見方)は単に、この問題にかんして現在流布している常識的な思い違いにすぎず、なにひとつ説明していないのである。(Lindesmith 1938c: 612)

かれが繰り返し強調するのは、科学的説明とはすべての事例に当てはまるものでなくてはならないということであり、したがって、精神医学の説明は、この原則を一切考慮していないということである。よって、道徳的発話としての精神医学的依存理論は却下され、やはり社会学的依存理論こそが科学であるとされるにいたるのである¹²⁾。

2.2 依存者神話

以上のような問題意識は、依存理論の文脈だけでなく、独立の問題意識へと至る。先の注釈(Lindesmith 1938b: 594 footnote3)が拡大され、「精神病者としての薬物依存者」(Lindesmith 1940a)や「ヤク中(dope fiend)」神話」(Lindesmith 1940b)という論文の中でより多くの事例で具体的に展開されることになる。その際、前者は主として精神医学における問題点を、後者は主として世間や犯罪学、司法の領域における薬物依存者解釈の問題点、すなわち依存が犯罪の原因であるという「神話」を告発している¹³⁾。

このような、ある意味でナイーブなかれの告発は、ここでは大きな反撃を受ける。「リンドスミスの神話(Lindesmith's Mythology)」と題された、サンフランシスコ地方裁判所の判事T・ミシェルスン(Twain Michelsen)の応答論文がそれである(Michelsen 1940)。

ミシェルスンの反論は、レトリックを駆使した非常に政治的なものである¹⁴⁾。たとえば、リンドスミスの「この問題(引用者注:薬物使用者問題)を担当する刑事政策機構の組織は、偏見のない客観的な分析の名の下で行われたものよりもむしろ、世間の迷信に直接的に立脚している」(Lindesmith 1940b: 199)という文章を受けて、この刑事政策機構の組織が「米国財務省、米国公衆衛生局、刑事局、司法長官などを含むに違いない」(Michelsen 1940: 376)などとし、これらのほかに「夜を徹して仕事をする(never-sleeping)政府のエージェンシー」として関税局や沿岸警備隊など、大規模な陣営を囲い込みながら、これらの「市民のために働く者たち」の敵対者としてリンドスミス位置づける。さらに、公共の利益のためのこれら各部門の活動を強調したのち、以下のようにいう。

(引用 16)

その者(引用者注:ヤク中)は米国に年間500億ドルも使わせる犯罪組合の首領(the leader of the Fraternity of Crime)なのだ。その者のまわりに神話などない。その者の道徳の放棄は錯覚などではなく、それがゆえにその者は世間最大の敵なんだ!(Public Enemy No.1!)(Michelsen 1940: 382)

実はミシェルスンのいう薬物と犯罪の因果関係は、この時点では実証されてはならず、不問の前提として語られていたものである。これが大規模な実証研究によって疑問にふされるのは、かなり後になってからのことである¹⁵⁾。しかしいずれにしても、このような経過を経て、リンドスミスはまた別の説得方法を持ち出すことになる。のちに英国の薬物政策を下敷きにして述べることになる、薬物依存は犯罪としてではなく病気として処遇するべきだ、という見解がそれである(Lindesmith 1957)。

しかしそのときすでに、社会学者による薬物政策への介入の道は閉ざされてしまっていたようだ¹⁶⁾。もっとも、これは社会学と政策の関係という、ここでの目的とはまた多少別の議論になるだろう¹⁷⁾。

2.3 質的調査の正統性

さて、薬物研究をその出発点とし、のちにシンボリック相互作用論の立場からの社会心理学の教科書をまとめるリンドスミスではあるが、かれ自身は、犯罪学をも自らの重要な領域と捉えている。これはなにも、依存が薬物にかんするものであり、それゆえに犯罪学である、ということの意味しているわけではない。そうではなく、実はかれ自身の事実上のデビュー論文が、これまでみてきたような薬物にかんするものではなく、犯罪学の系譜にかんするものであるからである。

その論文とは、1937年にAJSに掲載された「犯罪学におけるロンブローゾの神話(The Lombrosian Myth in Criminology)」(イェール・レヴァイン Yale Levin との共著)である¹⁸⁾。ここでかれらは、近代犯罪学の祖としてのC・ロンブローゾ(Casera Lombroso)の位置に異議を唱える。

あえて断るまでもないだろうが、ロンブローゾはイタリア犯罪学派と呼ばれることになる生物学的犯罪学を提唱した中心人物のひとりである。かれは、それ以前に流行していた進化論や骨相学などの知見をもとに、犯罪者の生物学的決定論を唱えた¹⁹⁾。そこではとくに、人間の進化という観点、すなわち発生反復説が重要な視角を構成している。これはようするに、犯罪者とは正常な人間ではなく精神的にも肉体的にも進化の不十分な劣った人間であり、それゆえにその兆候は身体に現れているとし、頭蓋骨の測定による犯罪人類の把握など、外的な形状を問題にできたのである。

しかしながらリンドスミスらは、近代犯罪学の祖の位置にあるのは決してロンブローゾではなく、まず第一に、道徳統計(la Statistique Morale)の推進者であったM・ゲリー(Michel Guerry)やA・ケトレ(Adolphe Quetelet)であるとする。そしてリンドスミスらの論文執筆時にはすでに一般的となっていたいくつかの手法の起源をこの二人におき直し²⁰⁾、その伝統の中ではロンブローゾがなにひとつ貢献せず、むしろ一部ではそれまでの発展を逆戻りさえさせたことを指摘するのである²¹⁾。

(引用 17)

この半世紀にわたる少年非行にかんする議論と研究に対して、(中略)ロンブローゾとかれの弟子たちは、ほとんどか、あるいはなにひとつつけ加えてはいない。それどころか、おそらくかれらの学説は、十九世紀の最後の十年間における少年非行の問題について、関心を衰退させることに実質的に貢献したのである。(中略)ロンブローゾが行ったことは、ゲリーやケトレの時代以来受け入れられてきた説明方法を逆行させたことであり、制度や伝統が犯罪者の性質を規定すると主張する代わりに、犯罪者の性質が制度や伝統の性質を規定するとしたことである。(Lindesmith and Levine 1937: 659-61)

この論文でリンドスミスらが、ゲリーやケトレのみを犯罪学の創設者としているわけではないことは、さらに重要である。この二人に加えて、やはりかれらが活躍した当時の、ということは十九世紀はじめから中頃にかけての、犯罪研究とジャーナリズムが、犯罪者の世界を理解するためにいわゆる質的な調査研究の必要性を強くうったえ、実際にそれを行っていたことが強調されるのである。

(引用 18)

ロンブローゾより50年前にゲリーとケトレによって使用された犯罪研究における統計的手法

に加え、やはり十九世紀はじめにデータを集めるために使用された方法がある。その方法とは、のちに「参与観察者 (participant observer)」の方法と呼ばれることになるものである。われわれはこの言葉で、生活史ドキュメントの使用、監督下でない犯罪者の観察、「オープンな状態での」犯罪者の研究と呼ばれるもの、これらのことを指している。(中略)盗人や犯罪者の陳述、生活史ドキュメント、あらゆる種類の犯罪者と広範囲にわたって実際に接触した外部観察者が共感をこめて行った説明、これらのものが、この時期(引用者注:十九世紀前半部)の文献にはあふれているのである。(Lindesmith and Levine 1937: 663)

あらためて指摘するまでもないことだろうが、これは明らかに初期シカゴ学派で採用された調査研究の方法を指している。そしてここで具体的に挙げられるのは、たとえば英国の犯罪研究者H・メイヒュー(H. Mayhew)である。かれは主として統計を用いたが、それを補完するために大量な自伝的ドキュメントを使用していた。あるいは、本人自身がかつて盗人であったF・ヴィドック(F. E. Vidocq)の自伝『泥棒たち(Les Voleurs)』への言及もあり、あるいはまた1860年の『コーンヒル・マガジン(Cornhill Magazine)』の「盗人と盗み(Thieves and Thieving)」という無署名記事において、次のような主張がなされていたことにも着目している。

(引用19)

私は、どんな階級や性質の人たちに対してでも、かれらの間に足を踏み入れてはじめて、そして、かれらが自由な話し合いをなん時間もしているのをみてはじめて、さらに、かれらが自分たちのために語らざるをえないことに耳を傾けてはじめて、かれらを理解することができる信じている。だからこそ、私は牧師として、過去何度も職業的な盗人の発端、性質、行為、習慣を知ることになる機会を最大限生かしたのである。(Lindesmith and Levine 1937: 663)²²⁾

このような伝統を逆行させたのがロンブローゾであり、かれを近代犯罪学の祖とする考え方がこれほどまでに広がっているのは、欧州よりもむしろ米国特有の現象であると、すなわち「アメリカ製品(an American product)」であると、リンドスミスらはいふ²³⁾。それはアメリカ特有の神話であるとしているのである。

ただし、ここで注意すべきことは、初期シカゴ学派の源流が実は十九世紀中頃までの欧州の犯罪研究にあった、ということよりもむしろ、リンドスミスらがそのような犯罪研究の伝統を主張あるいは再想像することで、生物学的決定論を排し、初期シカゴ学派にみられるような調査研究方法が、かれら自身にとって正統であることを主張しえたということである。

3 リンドスミスと科学的方法

3.1 初期シカゴ学派とリンドスミスの方法

リンドスミスらが、「ロンブローゾの神話」をことさらに告発する必要があったのは、逆にいえば、依存研究や犯罪研究を取り巻くある種の困難さを感じていたからに違いない。それは、かれが行った他の「神話」措定からもうかがえよう。すなわち、世間一般や政策において受け入れられているのは犯罪者や依存者に対する生物学的あるいは心理学的決定論的な思考であった、という事態である。そして実はこのような事態は、初期シカゴ学派がおかれた思想状況と一致するものであった。

初期シカゴ学派においても、自己を成形するために措定された他者のひとつは、生物学的決定論的な心理学であった。たとえば、フレデリック・M・スラッシャー (Frederic M. Thrasher) の『ギャング』(Thrasher 1927)における一貫したテーマは、発生反復説にもとづく通俗化された心理学(ギャング本能説)の反駁である。発生反復説にもとづく通俗化された心理学とは、たとえば、10歳から16歳までの少年は氷河期の身体と精神をもっている、あるいは未開人にはギャングは必然である、あるいはまた、先祖からギャング活動を受け継いでいる、といったような説明である。スラッシャーはこれに反論するために、さまざまなドキュメントにもとづいて、さまざまな角度からギャングの調査研究を行い、「社会過程としてのギャング」を位置づけたのである(佐藤 1997)。

リンドスミスもまた、「神話」という表現によって、決定論的な思考に反駁する。それが主として、精神医学や、それがより通俗化された依存者観であり、あるいは生物学的犯罪学であることは、前節において確認したとおりである。

ただし、もし決定論的思考だけが問題となるのであれば、ゲリーやケトレに端を発する統計的手法や生態学的アプローチを、かれが採用してもおかしくはなかったはずである。実際、初期シカゴ学派が質的調査の源流と目される一方で、統計的手法や生態学的アプローチを採用していたことはあきらかであり、それに追従する方法をリンドスミス自身が用いることもできたはずである。ところがかれは、そうはしなかった。なぜなのか。

これに対しては二つの契機を想定できるだろう。ひとつは、サザランドの影響であり、もうひとつは、ブルーマーの、したがってミードの影響である²⁴⁾。

3.2 サザランド

ここでサザランドに言及するのは、あるいは意外かもしれない。というのは、サザランドは、1931年から1935年までのきわめて短期間、シカゴ大学大学院のスタッフであったにすぎないからである。

しかしながら先にも述べたように、サザランドがこの時期行った授業には、コンウェルをゲスト講師で招くようなものもあった。ここにはあきらかに、犯罪現象を犯罪者の側から理解しようという姿勢がみられるだろう。すなわち、十九世紀中頃に主張された犯罪研究のスタンスであり、初期シカゴ学派のスタンスである。また、サザランドとコンウェルの共著から思い出されるのは、先にリンドスミスらが言及した、ヴィドックの自伝である。これらからすれば、先のリンドスミスとレヴァインの論文自体、当初はサザランドの指導の下に構想されたものだと考えられる。そしてサザランド自身がこの時期、かれの研究経歴からすると珍しく方法論に傾斜した時期だったこともまた、リンドスミスに影響を及ぼしていると考えられるのである。

リンドスミスはサザランドの死後、アルバート・コーエン (Albert Cohen) 、カール・シュスラー (Karl Schuessler) とともに『サザランド論集 (The Sutherland Papers)』を編集している (Cohen et al. 1956) 。この論集の「第7部 方法とテクニク」の紹介に、かれらは以下のように記している。

(引用 20)

これらの論文(引用者注: 第7部の三論文)や書評をのぞくと、サザランドは方法という主題にかんしては比較的わずかしか論じていない。そしてその方法を論じたもののほとんどが、かれがシカゴ大学で研究教授 (a research professorship) をつとめていた短い期間のものなのである。おそらくこの職業上の環境が方法論的問題に対する、かれのつかの間の関心を説明するであろう。しかしながら、かれの長きにわたる中心的な関心は、方法論的な問題にではなく、犯罪に

ついでに、適切な説明の構築にあったのである。(Cohen et al. 1954: 228)

ここでまず注目されるのは、サザランドが刑務所における調査について論じたものである(Sutherland 1931)。そこでは、刑務所における三種類の受刑者調査が論じられている。ひとつは、刑務所の医務官が行う主として医療的な調査。もうひとつは、精神科医、心理学者、社会学者が協力して行う幅広い調査。最後に、刑務官が行う受刑者を管理するために行う調査である。サザランドはこれらを論じたあと、刑務所の調査は単なる管理のためではなく、より幅広い「犯罪性の一般的知識」研究に有用であろうと述べている。かれは、いうなれば、病院で患者を調査するように、刑務所で受刑者を調査することを薦めたのであり、これが、リンドスミスが当初夢見た大規模調査につながっているととも考えられるだろう。

もちろんそれだけではない。より重要なのは、おそらく、論集以前には未公開論文であった「マイケル アドラー報告 (The Michael-Adler Report)」(Sutherland 1932-3)にかかわるものである。この論文は、ニューヨーク市社会衛生局に提出された二十世紀の米国犯罪学についての論文「犯罪、法、そして社会科学 (Crime, Law and Social Science)」に対するサザランドの応答である。マイケルとアドラーは、それまでの米国犯罪学の科学性があまりに未発達であり、それゆえ他の領域の科学者を中心にして犯罪調査を行った方がいいと論じ、これに対しサザランドは一部その主張に賛意を示しつつも、全体としてはこれを否定し、犯罪学擁護の論陣を張っている。もっとも、リンドスミスら編者のコメントによれば、サザランドはこのレポートに対し、最初は反感を持ったものの、その後は非常に影響を受けたという。

(引用 21)

インフォーマルな議論の場において、サザランドは、マイケル アドラー報告の中にある犯罪学的調査の否定的な評価は、本質的に正しいということに同意していた。そして、先に述べた論文(引用者注: サザランドの 1942 年講演論文、Sutherland 1942)では、このレポートに重要な影響を蒙り、抽象的一般化へと関心が向いたとしているのである。(Cohen et al. 1954: 230)

このようなサザランドの影響下にあったことが、リンドスミスが調査研究の科学性に重きをおくことになったひとつの契機であったと考えられよう。より正確に言えば、かれが、自らの研究が「科学」であることを、ことさらに表現した理由は、ここにあると考えられるのである²⁵⁾。

3.2 ブルーナー経由ミード

もっとも、その科学性を、ではどのように具体化したのか、ということにかんして言えば、リンドスミスの依存研究を概観してもわかるように(引用2および11)、ブルーナー経由のミードの影響は絶大なものである。つまり、科学性を保証するためであっても、かりにある種のパースペクティブにしたがえば、統計を駆使することも可能である。しかしそこで、「ミード流の社会心理学とそれに関連する思想の流れ」(引用2)を参照することにより、科学というものの性質が規定されてくることになる。

これはいいかえれば、こういうことになる。すなわち、ある特定の科学的方法に重きをおかない犯罪研究は、初期シカゴ学派におけるような調査方法を駆使することによって成り立ちうる。しかしながら、そこにミード流の科学的方法あるいは科学的理論という観点を導入すれば、調査方法あるいは資料が、その科学的理論構成方法の要請にしたがう方法論的前提によって制限される、ということ

ある。

その意味では、統計的手法は、ここでいう理論構成方法の要請にはしたがわないものである。リンドスミス自身がいうところによれば、「個々の人間は、電子とは違い、直接的な観察に利用しやすいので、彼らを集合としてのみ研究する必要などない」(Lindesmith 1968: 22) のであり、統計的手法によって、「個々の事例が見失われてしまって集合の描写に溶けこんでしまうようなレベルの分析では不適当」(Lindesmith 1968: 22) なのである。なぜなら、そこでは(リンドスミスがいうところの)厳密な因果関係が構成できないからである。それゆえ、かれはインタビューに代表される、個人的な認識の聴取や行為の外観に固執したのである。

しかしこれは逆に考えると、分析的帰納という方法論によって隠されてしまいがちではあるが、さらには、ミードへの度重なる言及が覆い隠してしまいがちであるが、リンドスミスの用いた方法、すなわち当初は観察と会話、次にインタビュー、さらには文献研究といった継時的に調査が配置されるその方法は、実は、初期シカゴ学派が用いた方法、すなわち対象を知るためであれば手に入れられるあらゆるドキュメントを使うという方法、に極めて近いともいえるのである。ただそれが、理論構成方法の要請にしたがう方法論的前提によって制限された、すなわち、分析的帰納という方法にしたがって、時間的な配列として編成し直されたということなのである。

つまり、リンドスミスにおける科学的方法の意義とは、初期シカゴ学派におけるあらゆるドキュメントを使用する方法を、時間的な配列として編成し直すことにより、分析的帰納へと発展させたことにあるといえるのである。

結びにかえて

以上、初期シカゴ学派と第二次シカゴ学派のあいだにあって、リンドスミスの研究がどのように構成されたのかをみてきた。細かい論点は本論にゆずるが、簡単に要約すれば次のようになるだろう。

すなわち、リンドスミスの研究は、サザランドの影響下において、初期シカゴ学派と同じようにある特定の決定論を思想上の他者すなわち「神話」として構築することにより、その他者との相互作用を通じて、「科学」であることを希求する。その際利用された調査方法は、実は初期シカゴ学派から受け継がれたものではあるが、とくにそれはある不幸な事情のもとで、対象者を深く理解する必要のある方法となっていた。そのような伝統的な調査方法は、ブルーマーによってもたらされたミード流の社会心理学の理論的要請により、分析的帰納という構成方法をとるにいたった。そこでは、初期シカゴ学派の調査方法の一部が理論的要請によって削り落とされ、その一方で時間的な配列として編成し直された。そしてどの科学的方法の結果として作り上げられた研究は、のちに第二次シカゴ学派を代表する思考方法(つまり理論と方法)より一般的にはシンボリック相互作用論と呼ばれるある特定の思考方法によるものとなったのである。その意味で明らかに、リンドスミスは一つの結び目を構成しているのである。

さらにこれらから示唆されることは、初期シカゴ学派においてはミードの影響、少なくともその科学的方法の影響はほとんどない、ということである。もしそこに影響があったのであれば、その科学的理論構成方法の要請にしたがい、初期シカゴ学派特有の多岐にわたる調査方法は、制限されてしまっていたはずだからである。そして逆に、そのようなミード流の方法の影響を受けていないことこそが、初期シカゴ学派流の、知るためには使えるものはなんでも使うといった、ある意味で無節操で魅力的な調査方法を、それを直接引き継いだシンボリック相互作用論以外の何らかの観点からであっても、再

び編成し直しながら、あるいはさらに深化させながら、利用することを可能にしている、少なくともその可能性を提示している、ともいえるのではないだろうか²⁶⁾。

注

- 1) ブルーマーのシカゴ大学着任は1929年である。
- 2) おそらくその間に行われたドイツ社会学の研究の一部は、彼の犯罪学批判に結びついていると考えられる。これについては後述することになる。
- 3) おそらく断るまでもないが、Conwellとは、Con + well、つまり詐欺上手を意味する造語であり、すなわち匿名であることを示している。
- 4) ここでコンウェルの経歴にかかわる興味深いエピソードを紹介しておきたい。コンウェルの薬物使用歴について、サザランドは以下のように記している。

三度目の入獄は、麻薬関連の事件によるものである。彼は、これらの刑期のあい間には、ほとんど間断なく窃盗を続けていた。三度目の刑期を終えて釈放されてから一九三三年に死ぬまでは、仕事があるときにはまじめに生業について働き、この間麻薬を使用することは無かった。(Conwell and Sutherland 1937=1986: vii)

しかしながらこの使用歴は、かれの死亡時期と同様に、サザランドによって創作されたものだと考えられる。あるいは、死亡時期を創作したために、それにとまって書き換えられた使用歴だと考えられよう。リンドスミスは、コンウェルがサザランドの死後(サザランドの死は1950年)数年たってから死亡したこと、そして晩年の数年間は再び薬物を使用していたこと、さらにはサザランドの助言にしたがって、退薬症候を避けるために自主的にレキシントン公衆衛生局病院に通っていたことを明らかにしている。そしてかれはこの大恩人が死ぬまで交流を保っていたことを記している(Lindesmith 1968: 5)。

- 5) 分析的帰納はズナニエツキによって最初に定式化されたものであるものの、一部ではリンドスミスはズナニエツキには影響されていないとされている。ただしリンドスミス自身がジェニファー・プラット(Jennifer Platt)によせた手紙によると、確かに自然科学のロジックから自分で引き出したものであるというものの、やはりズナニエツキを読んでいたということも認めているし(Colomy and Brown 1995: 64-65)。何よりもその著書には、ズナニエツキの方法でこの研究を行うと明言されている(Lindesmith 1947: 19-20)。もっとも、これらの議論においてとりわけ不思議なのは、この点について、ミードへの言及がなされていないことである。リンドスミスによる分析的帰納への最も重要な影響は、おそらくミードであろう。この点については本論で後述する。また、これを理論構成の局面に限定せず、調査を含めた全体的なものと考え、ベッカーのいう継時的分析(sequential analysis)になる(Becker 1971)。
- 6) 本来であればここで引用する依存の定義は、彼の依存理論にかんする最初の論文によるものでなくてはならないのだが、残念ながらその論文において、彼は明確な定義を行っていない。
- 7) リンドスミスによれば、初期の仮説は、かれ自身が依存者を観察したことと、彼らとの会話によって構成されたという。インタビューが直接利用されるのは、そのあとのことである(Lindesmith 1968: 7)。
- 8) これらの仮説構成過程における指針を、リンドスミスは以下のように表現している。

(1)理論の検証とは、その理論を支持する選ばれた事例の積み重ねにあるのではなく、その理論から演繹できる明白な論理的含意と矛盾する証拠を探ることにある。(2)依存についての妥当な理論は、依存の基本的あるいは本質的諸側面を説明しなければならず、その説明は、その理論に論理的に伴うか、その理論によって予言される体系あるいはパターンをその諸側面が形成しているということを示すことによって行われる。(Lindesmith 1968: 9-10)

- 9) 「薬物依存の社会的理論」(Lindesmith 1938b: 606)の箇条書きされた命題も参照。こちらに原型があると考えられる必要がある。
- 10) このような独特の観点が、のちにベッカーのマリファナ使用者研究(Becker 1953)へとつながっていることは、ベッカー自身が述べているところでもある。もっとも下記のコメントの問題点は、より厳密に考えるのであれば、依存の有無は実は方法には関係がないということである。

私はマリファナ使用者を研究するためのアイデアをリンドスミスの『阿片依存 (Opiate Addiction)』(1947) から得たが、方法を変えなくてはならないだろうということも分かっていた。マリファナには依存性はないからだ。(Galliher 1995: 170)

- 11) もっともこれもひとつの推測の域を出ない、ということは念頭においておく必要がある。というのは後述するように、かれの研究をめぐるやりとりこそが、このように洗練され、権威づけられた観点(すなわちデューイへの言及)をのちに必要としたと捉えることも可能だからである。
- 12) かれの依存理論は、こののち、再び批判にさらされる。W・マコーリフとR・ゴードンは、長期間にわたる依存者調査をもとに、リンドスミスが、依存者の薬物摂取後の状態を「普通(normal)」だとしたことに異を唱え、やはり「陶酔感(euphoria)」が依存を維持しているとした(McAuliffe and Gordon 1974)。これに対してリンドスミスは、二人は、リンドスミスの理論の基盤を動機だと解釈しているが、依存者が薬物を求めるという現象(すなわち依存)は、ある特定のタイプの経験の繰り返しによって作られるのであって、動機によって作られるのではない、と反論している(Lindesmith 1975)。後に述べることを考えあわせると、このような、かれの研究をめぐる論争(あるいは対話)こそが、かれの観点、あるいは表現を洗練していったと捉えられるだろう。
- 13) 先に引用したかれの述懐(引用4)からすれば、この問題意識が、依存者とのつきあいの中で次第に育て上げられたとも推測できる。さらに、(引用16)にみられるような反論を受けたのちに、この問題意識は、より具体的な政策提言(依存の疾病化、Lindesmith 1957)へと形作られていく。
- 14) ただし、わが国とは異なり、米国の判事は社会問題や時事問題に対して積極的な発言を行う傾向にあり、それゆえ、このような論文が判事によって書かれること自体は、それほど特別なことではない。
- 15) この主題は、薬物 犯罪関係(Drug-Crime relation or connection)と呼ばれるものだが、現在では多くの薬物使用者研究において、薬物使用に先立つ犯罪経歴が指摘されている(たとえば、Inciardi 1986)。すなわち、薬物使用による犯罪経歴の開始、というミシェルソンの想定した因果関係は、統計的には否定される傾向にある。
- 16) ジェームズ・A・インシアードィ(James A. Inciardi)は、リンドスミスの「ヤク中の神話」論を示しながら、「このようにして、薬物政策への社会学の最初の貢献は、あまり良く思われなかったのである」(Inciardi 1987: 181)としている。また、P・コンラッドとJ・シュナイダー(Conrad and Schneider 1992)は、リンドスミスに医療化(medicalization)を押し進めた社会学者として批判しているが、「依存を病気として処遇するべきだ」というかれの見解は、このような政策立案者側との相互作用を経て行われたひとつの選択であったことをつけ加えておくべきであろう。もっともここに、依存と依存者、すなわち行為と行為主体を切り離さないリンドスミス特有の問題点をみることも確かである(佐藤 1995)。
- 17) この観点において興味深いのは、シンボリック相互作用論の犯罪研究の伝統の中で、政策にコミットする研究者とコミットしない研究者の違いである(Galliher 1995)。おそらくこの違いは、今日においてもなお、たとえば科学的知識の社会学(Sociology of Scientific Knowledge: SSK)と科学政策志向の社会学(Science, Technology and Society: STS)の違いとしてとして、あるいは医療社会学の二つの流れ(Sociology of MedicineとSociology in Medicine)として、捉えられているものでもあろう。これらにみられるように、収斂方向を二分してしまうような社会科学的知識のあり方そのものは、非常に興味深い問題だが、残念ながら今回は立ち入ることができない。
- 18) この論文には、英国、フランス、ドイツの古い犯罪研究や新聞などが盛んにとりあげられており、リンドスミスのそれまでの研究成果の一端が現れていると考えられるだろう。
- 19) もっとも、一口にロンブローゾの犯罪学といっても、かれが世間で注目を集めだした頃とそののちとでは、その主張に開きがある。当初強い生物学的決定論を主張した彼であっても、激しい批判を受け、しだいに社会的要素を重視するようになっていった(Darmon 1989 = 1992; Gould 1996 = 1998)。
- 20) 現在ではよく知られていることであるが、かれらは、たとえば初期シカゴ学派の「生態学的アプローチ(ecological approach)」の起源もそこにあると捉えている。以下の記述を参照。

そう知られているわけではないが、今日行われている犯罪研究の「生態学的アプローチ」は、一世紀以上前に最初に使用されていたといっても差し支えあるまい。(Lindesmith and Levine 1937: 657)

- 21) これは今日においてもなお興味深い指摘であるかもしれない。たとえば瀬川(1998)は、近代犯罪学の誕生をロンブ

ローゾに始まる実証主義犯罪学にとらえ、ゲリーとケトレには、実証主義犯罪学の源流のひとつの地位しか与えていない。

- 22) この無署名記事が、自らを「牧師として (as a clergyman)」と記述していることは、初期シカゴ学派との関連では注目に値するだろう。
- 23) リンドスミスらは、ガブリエル・タルド (Gabriel Tarde) から二十世紀初頭の犯罪学に寄与した欧州の社会学者たちの名前を挙げながら、かれらが犯罪学の創設者としてゲリーとケトレの名を挙げていることに言及している。さらに、なぜ米国でこれほどまでにロンブローゾが受け入れられたかについて、6つの条件を挙げて論じている (Lindesmith and Levine 1937: 667-71)。
- 24) ちなみに、リンドスミスのはじめての著作である『阿片依存 (Opiate Addiction)』 (Lindesmith 1947) の献辞は、まず最初にブルーマー、次にサザランドに捧げられている。
- 25) リンドスミスは学位取得後、サザランドが学部長をつとめるインディアナ大学社会学部に赴任することになる。
- 26) エスノメソドロジストであり、会話分析の創始者の一人として知られるハーヴェイ・サックス (Harvey Sacks) は、その講義の中で敬意をはらって初期シカゴ学派の調査研究の包括性に言及しながら、「かれらの仕事と私が行おうとしていることの違いは、私が、読者が著者と同じだけの情報を手に入れて、再分析できるような社会学を発展させようとしているということなのです」 (Sacks 1964: 27) といっている。これは、かれが初期シカゴ社会学の調査研究を評価しつつ、再現性という観点から調査研究方法のあらたな編成と深化を企図していたことを示している。

参考文献

- Becker, Howard S., 1953, "Becoming a Marihuana User", *American Journal of Sociology*, 59(3), 235-42
- Becker, Howard S., 1971, *Sociological Work*, Allen Lane
- Cohen, A.K., Lindesmith, Alfred R. and K. Schuessler, eds., 1956, *The Sutherland Papers*, Indiana University Press
- Colomy, Paul and J. David Brown, 1995, "Elaboration, Revision, Polemic, and Progress in the Second Chicago School", Gary A. Fine ed., *A Second Chicago School?*, University of Chicago Press, 17-81
- Conrad, Peter and Joseph W. Schneider, 1992, *Deviance and Medicalization: from Badness to Sickness*, Temple University Press
- Conwell, Chic and Edwin H. Sutherland, 1937, *The Professional Thief*, University of Chicago Press. (=1986, 佐藤郁哉訳『詐欺師コンウェル』新曜社)
- Darmon, Pierre, 1989, *Médecines et Assassins à la Belle Époque*, Edition du Seuil. (=1992, 鈴木秀治訳『医者と殺人者：ロンブローゾと生来性犯罪者伝説』新評論)
- Fine, Gary A., ed., 1995, *A Second Chicago School?*, University of Chicago Press
- Gallihier, John F., 1995, "Chicago's Two World of Deviance Research: Whose Side Are They On?", Gary A. Fine ed., *A Second Chicago School?*, University of Chicago Press, 164-187
- Gould, Stephen J., 1996, *The Mismeasure of Man*, Norton. (=1998, 鈴木善次・森脇靖子訳『人間の測りまちがい』河出書房新社)
- Inciardi, James A., 1986, *The War on Drugs: Heroin, Cocaine, and Public Policy*, Mayfield
- Inciardi, James A., 1987, "Sociology and American Drug Policy", *The American Sociologist*, 18(2), 179-88
- Lindesmith, Alfred R., 1938a, "The Argot of the Underworld Drug Addict", *Journal of Criminal Law, Criminology and Police Science*, 29(2), 261-78
- Lindesmith, Alfred R., 1938b, "A Sociological Theory of Drug Addiction", *American Journal of Sociology*, 43(4), 593-609
- Lindesmith, Alfred R., 1938c, "Rejoinder", *American Journal of Sociology*, 43(4), 611-3
- Lindesmith, Alfred R., 1940a, "The Drug Addict as a Psychopath", *American Sociological Review*, 5(6), 914-20
- Lindesmith, Alfred R., 1940b, "'Dope Fiend' Mythology", *Journal of Criminal Law, Criminology and Police Science*, 31(2), 199-208
- Lindesmith, Alfred R., 1947, *Opiate Addiction*, Principia Press
- Lindesmith, Alfred R., 1957, "The British System of Narcotics Control", *Journal of Contemporary Problems*, 22(1)

, 138-54

- Lindesmith, Alfred R., 1963, "Addiction : Beginnings of Wisdom", *The Nation*, January 19
- Lindesmith, Alfred R., 1965, *The Addict and the Law*, Indiana University Press
- Lindesmith, Alfred R., 1968, *Addiction and Opiates*, Aldine
- Lindesmith, Alfred R., 1975, "A Reply to McAuliffe and Gordon's "A Test of Lindesmith's Theory of Addiction"", *American Journal of Sociology*, 81(1), 147-53
- Lindesmith, Alfred R., 1981, "Symbolic Interactionism and Causality", *Symbolic Interaction*, 4(1), 87-96
- Lindesmith, Alfred R. and Yale Levine, 1937, "The Lombrosian Myth in Criminology", *Amrican Journal of Sociol-ogy*, 42(5), 653-71
- Lindesmith, Alfred R., Strauss, A.L. and N.K. Denzin, 1978, *Social Psychology* 5th edition, Holt, Rinehart and Winston. (=1985, 船津衛訳 『社会心理学』 恒星社厚生閣)
- McAuliffe, W.E. and R.G. Gordon, 1974, "A Test of Lindesmith's Theory of Addiction", *American Journal of Soci-ology*, 79(4), 795-840
- Mead, George H., 1917, "Scientific Method and Individual Thinker", John Dewey ed., *Creative Intelligence: Es-says in the Pragmatic Attitude*, Holt, Rinehart and Winston, 176-227
- Michelsen, Twain, 1940, "Lindesmith's Mythology", *Journal of Criminal Law and Criminology*, 31, 373-400
- 佐藤哲彦, 1995, 「リンドスミスによる麻薬研究の二つの位相」『京都社会学年報』3, 39-56
- 佐藤哲彦, 1997, 「社会過程としての<ギャング>」寶月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣, 251-91
- 瀬川晃, 1998, 『犯罪学』成文堂
- Sacks, Harvery, 1964, "Lecture 4 An Impromptu Survey of the Literature", Sacks (Jefferson, G and E.A. Schegloff eds.), 1992, *Lecture on Conversation*, Blackwell, 26-31
- Slight, David, 1938, Comment, *Amrican Journal of Sociology*, 43(4), 610-1
- Sutherland, Edwin H., 1931, "The Prison as a Criminological Laboratory", Cohen et al. eds., 1956, *The Sutherland Papers*, Indiana University Press, 247-56
- Sutherland, Edwin H., 1932-3, "The Michael-Adler Report", Cohen et al. eds., 1956, *The Sutherland Papers*, Indiana University Press, 229-46
- Sutherland, Edwin H., 1942, "Development of the Theory", Cohen et al. eds., 1956, *The Sutherland Papers*, Indi-ana University Press, 13-29
- Thrasher, Frederic M., 1927, *The Gang: A Study of 1313 Gangs in Chicago*, University of Chicago Press

(さとうあきひこ 熊本大学文学部)